

公認心理師による身体疾患患者に対する心理検査の多職種連携促進や
医療チームによる患者理解への活用可能性に関する研究

研究分担者 満田 大 慶應義塾大学医学部
研究協力者 中村菜々子 中央大学文学部

研究要旨

本研究では、公認心理師による身体疾患患者に対する心理検査が患者理解や支援にどのように寄与しているかを明らかにすることを目的とし、身体疾患患者の治療に関わり、公認心理師との協働経験を有する医療専門職へのインタビュー調査を実施した（n=20）。得られた逐語録データに対してテキストマイニングを実施した。共起ネットワーク分析を行い、心理検査の機能、評価されている心理的側面、検査が活用されている医療領域など、16のサブグラフを抽出した。結果から、公認心理師による身体疾患患者への心理検査は、心理状態や性格傾向、認知機能の把握に加え、生活史や家族背景、社会的文脈などを含む多面的アセスメントを通じて、他職種による患者理解や支援方針の形成を支えていることが明らかとなった。こうした心理アセスメントの実践は、チーム医療における公認心理師の役割を実証的に裏付けるものであり、診療報酬を含む制度的評価の重要性を示唆する知見となった。

A. 研究目的

心理職の国家資格である公認心理師は、2017年9月に公認心理師法が施行され、2018年に第1回の国家試験が行われ、2023年3月末時点で69,875人が資格登録されている。公認心理師法において、公認心理師は4つの業を行う者と定義されている。すなわち、①心理に関する支援を要する者の心理状態の観察、その結果の分析、②心理に関する支援を要する者に対する、その心理に関する相談及び助言、指導その他の援助、③心理に関する支援を要する者の関係者に対する相談及び助言、指導その他の援助、④心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供、である。

精神疾患の増加や、いじめやひきこもり、児童虐待、自殺といった学校や社会の問題を背景として、心理に関する支援が必要な人（要支援者）やその関係者に対して、保健医療、教育、福祉、司法、産業といった複数の分野において、支援の充実が求められている。中でも、保健医療分野は公認心理師の割合が非常に大きい。

2020年に実施された「公認心理師の活動状況等に関する調査」では、保健医療分野における業務内容として、「個人に対する心理検査」が76%、「個人に対するアセスメント面接」が75%と活動の上位となっている（日本公認心理師協会、2021）。また、今後期待される支援・活動等に関しても、「各種心理検査を用いた専門的アセスメント」が71%、「生活史・家族関係等の背景要因等をふまえたアセスメント」が68%と、心理検査やアセスメントへの期待が大きいことがうかがえる。

がん・糖尿病・脳卒中・心筋梗塞等、国民の多くが罹患する身体疾患において、患者の心理的安定は、予後やQOL、医療者の負担軽減などの点から重要で、医師や看護師らによる医療チームとメンタルヘルス専門職との協働は不可欠である。公認心理師法施行で、公認心理師も臨床心理学の専門職として「緩和ケアチーム」「精神科リエゾンチーム」などの一員として、様々な身体疾患患者への直接的介入に加え、医療チ

ームへのコンサルテーションや多職種との連携を通して、心理的支援を行うことが求められる。2022年の「医療機関における公認心理師が行う心理支援の実態調査」では、身体疾患患者に対する心理検査の実施率は40-80%で、心理検査を実施する利点として、医療チームでの知識や理解が深まることで、より良い患者支援につながるとの指摘がある（日本公認心理師協会、2022）。しかしながら、上記調査は包括的な調査であるため、わが国における現状をより具体的に把握するには不十分なデータである。この調査以外に検討された研究は事例報告レベルがほとんどであり、今後は科学的に妥当な方法で身体疾患患者に対する心理検査の実施状況ならびに多職種による患者理解や患者支援への心理検査の寄与に関して検討を行う必要があると考えられた。

前年度の分担研究では、身体疾患患者に心理検査を行ったことのある公認心理師を対象に、身体疾患患者に対する心理検査の実施実態をウェブ調査によって検討した。その結果、入院、外来ともに実施している心理検査で多かったのは神経心理検査であり、他職種向けの心理検査のフィードバックで特に有用であったのは、患者対応への助言であった。したがって今年度の研究（本研究）では、身体疾患患者に関与している医療専門職を対象に、公認心理師による身体疾患患者に対する心理検査が患者理解や患者支援にどのように役立っているかについて質的な検討を行う。

B. 研究方法

研究対象者は、医療機関に勤務し身体疾患患者に関与している医療専門職であった。

手続きは、インタビュー調査を実施した。インタビュー調査は、ビデオ会議システム（zoom）によりオンラインで実施した。研究対象者は、身体疾患患者に関与している医療専門職が所属する学会やネットワークに周知、もしくは研究グループとつながりのある医療機関に打診し、インタビュー協力の打診を電子メールで行い、必要に応じて、インタビュー調査に適

当な対象者を紹介してもらうものとした。オンラインによるインタビュー調査の実施に先立ち、研究対象者には倫理審査委員会で承認の得られた説明文書（説明文書「インタビュー調査」）を配布し、十分な説明と質疑応答の時間を設けた上で、研究対象者の自由意思に基づく口頭同意を取得した。口頭同意の取得をもって登録とみなし、登録後にインタビューを開始した。インタビューを実施したインタビュアーは、身体疾患患者に対するコンサルテーション・リエゾン活動に従事し、身体疾患患者への心理支援や心理検査に造詣の深い公認心理師であった。

インタビューでの質問項目は、アンケートで対象者の情報（氏名・所属機関名・所属部署・メールアドレス・普段の業務・公認心理師との連携/協働）を回答してもらい、インタビューでは、公認心理師による心理支援がどのように役立っているか、公認心理師によるアセスメントがどのように役立っているか、公認心理師による心理検査がどのように役立っているか、支援の充実に向けて、心理検査を含むアセスメントに望むものはどのようなものか等について尋ねた。

（倫理面への配慮）

本研究は、慶應義塾大学医学部倫理委員会の承認のもと実施された（承認番号：20231179）。本研究では、オンラインによるインタビュー調査の実施に先立ち、研究対象者には倫理審査委員会で承認の得られた説明文書（説明文書「インタビュー調査」）を配布し、十分な説明と質疑応答の時間を設けた上で、研究対象者の自由意思に基づく口頭同意を取得した。口頭同意の取得をもって登録とみなし、登録後にインタビューを開始した。研究参加に同意した後でも、研究対象者が希望すればいつでも同意を撤回することができることとした。

（解析方法）

インタビューデータの文字起こしを行い、文字起こしされたテキストデータについてテキストマイニングを実施した。解析ソフトウェアはKH Coder（SCREENアドバンスドシステムソリューションズ；樋口，2023）を使用し、以下の手順で実施した。

データセットの作成：まず各インタビューデータ（逐語記録）からインタビュアーの発話を取り除き、インタビューデータののみを作成した。各インタビューのID、属性等、発話をそれぞれ表計算ソフトウェアexcelの別のセルに入力したものをデータセットとして作成した。なお、先行研究（細川他，2021）を参考に、有効データのうち、名詞、サ変名詞、形容動詞、タグ（複合語リストの語）、名詞C（漢字一文字の語）の品詞を分析に用いた。

前処理と語の抽出：「テキストのチェック」および「前処理」を実施し、解析に用いる有効データを準備した。その後「抽出語リスト」を実施し、語を抽出した。

テキストマイニング：「共起ネットワーク」解析を行い、テキストの可視化を行った。共起ネットワークとは、抽出された語と語の出現パターンが類似した語のつながり（共起関係）を可視化したものである。共起ネットワークグラフでは、抽出語はノードと呼ばれ、円として描かれる。ノード同士の共起関係は円同士を結ぶ線で描かれ、これはエッジと呼ばれる。どの程度の強さの共起関係を検討するかの基準は、探索的にいき、最終的に出現頻度が10回以上の語をノードとして抽出し、エッジの描画にはJaccard係数（共起関係の指標。0～1の値をとり、1に近いほど共

起関係が強い）が0.18以上となる共起関係を採用した。比較的強い結びつきが見られる単語群はサブグラフ検出（modularity）を実施し、まとまりを抽出した。サブグラフは、それら単語が含まれている結果について逐語録をたどり、その内容も含めてサブグラフのまとまりに命名し、考察を行った。命名・考察においては、分担研究者と研究協力者による複数の研究者間の合議で決定した。

C. 研究結果

1. 研究対象者属性・勤務先

研究参加者の概要は表1に示すとおりである。

インタビューの対象者は20名であった。20名の内訳は、女性14名（70%）で、平均年齢は40.2歳（SD = 7.6）であった。研究対象者の職種は、多い順に看護師11名（55%）、理学療法士5名（25%）、医師2名（10%）、管理栄養士と子ども療養支援士が1名（5%）で、アンケート回答時点での臨床経験年数は17年（SD 7）であった

公認心理師との協働年数は、1-3年未満が7名（35%）で最も割合が多く、次いで3-5年未満が5名（25%）、10年以上が5名（25%）、7-10年未満が2名（10%）、5-7年未満が1名（5%）であった。公認心理師と同じ部署かどうかについては、別部署が18名（90%）であった。公認心理師との協働の程度は、「必要に応じて協働し、その頻度は多い」が9名（45%）で最も多く、次いで「必要に応じて協働するが、その頻度は少ない」が8名（40%）で、「同じチームと一緒に活動している」が3名（15%）であった。

2. テキストマイニングの結果

（1）データ解析の対象

前処理を実施し、このうち解析に用いた名詞、サ変名詞、形容動詞、タグ、名詞Cの総抽出語は11960語であり、これらの語で構成された1931文、851段落のテキストを解析に用いた。

（2）語の抽出結果

上記のテキストに対して語の抽出を行った。それぞれ、名詞：688語（使用頻度5914回）、サ変名詞：414語（使用頻度4061回）、形容動詞：138語（使用頻度576回）、タグ：271語（使用頻度352回）、名詞C：130語（使用頻度1057回）が抽出された。

語の出現頻度の上位60位までをまとめたものが表2である。

（3）共起ネットワークの検討

共起ネットワークの結果を図1に示す。サブグラフの解釈を表にまとめたものが表3である。16のサブグラフが抽出され、それぞれ「心理検査による患者の心理状態・特性の理解ならびに他職種による対応への助言」「心理検査を含む心理アセスメントの活用」「カンファレンス等を通じた心理検査の結果の共有によるチーム医療の強化」「心理検査による客観的データと治療判断のサポート」「心理検査による患者の長所や強みの理解」「患者の性格傾向の理解と対応への助言」「発達障害患者への心理検査と対応への助言」「患者の認知機能評価と臨床的活用」「循環器疾患患者に対する心理検査とリハビリスタッフとの協働」「腎代替療法選択支援における心理アセスメント」「慢性疾患患者の療養支援における心理アセスメント」「移植領域における心理アセスメントと心理支援」「栄養指導における心理検査と対応への助言」「身体科領域における公認心理師」「身体疾患患者の心理的ケアと支援体制」「公認心理師による他職種への即時的対応」

と命名した。

D. 考察

テキストマイニングは仮説検証的な解析ではなく、探索的な解析である。また各可視化のツールは単語レベルで結果を表示しているため、その単語が含まれている結果については、逐語録をたどり、その内容も含めて考察を行う。

語が同時に出現している程度によって、その結びつきを示したものが共起ネットワークである。共起ネットワークは16のサブグラフに分かれた(表3)。

サブグラフ①～⑤は、心理検査が医療現場でどのように活用されているかに焦点が当たっているサブグラフ群であると考えられた。

サブグラフ①は「心理」「検査」「患者」「話」「看護」のつながりで構成されており、医療現場における心理検査の実践と、その結果や検査以外のアセスメントが他職種による対応への助言に関する語りを中心に構成されている。公認心理師が患者に対して行う心理検査や心理検査以外での心理アセスメントでは、患者の個別性や背景に応じて、話を聴くことが単なる情報収集ではなく、関係構築と安心感をもたらす重要な行為として位置づけられている。加えて、公認心理師による心理検査の結果や心理アセスメント結果の共有によって、看護師や医師など他職種が患者の心理状態や特性への理解を深め、自らの実践にあたっての参考としている内容も多くみられた。全体としてサブグラフ①は、心理検査による患者の心理状態・特性の理解と他職種による対応への助言を示していると考えられる。

サブグラフ②は「場面」「公認」「状況」「アセスメント」「活用」「必要」「有意義」「身体」「疾患」の語で構成されており、身体疾患領域における公認心理師の心理アセスメントの意義とその実践的活用に焦点を当てた発言で構成されていた。公認心理師による心理アセスメントは、心理検査の結果だけでなく、患者の状況や背景、心理状態を多面的に捉えることで、他職種にとっても有用な視点を提供し、有意義な介入や支援方針の策定に貢献している。特に移植医療や慢性疾患といった身体疾患を抱える患者に対しては、その時々場面に応じた柔軟な対応が求められ、公認心理師の専門性が活かされている。また、他職種が心理アセスメントを活用するためには、情報の共有体制や理解の促進が必要であるとされ、公認心理師のマンパワーや配置、チーム内での連携の強化が今後の課題として語られていた。サブグラフ②は、心理検査を含む心理アセスメントの臨床的価値を示していると解釈できる。

サブグラフ③は、「情報」「共有」「カンファレンス」のつながりで構成されており、公認心理師による心理検査の結果をいかに医療チーム内で効果的に伝達あるいは活用するかについて言及された内容であった。心理検査や面接を通じたアセスメントによって得られた情報は、患者理解を深め、適切な支援方針を立てるうえで不可欠なものである。それらの情報はカンファレンスという公式な場だけでなく、日常的な申し送りや口頭でのやり取りといった多様な共有の実践を通して、多職種で活用されていた。カンファレンスは、こうした情報を共有し、意見交換や合意形成の場として機能していた。全体として本サブグラフは、心理検査の結果の共有や共有方法の工夫を通じてチーム連携を促していることが示唆される内容と考えられる。

サブグラフ④は、「客観」「数値」の語で構成されていた。心理検査の数値や客観的なデータは、主観的な印象ではなく、共有可能な情報として機能し、特に医師や看護師に対する説明の際に納得感を生む材料となっていた。また、現場での違和感や気づきが心理検査の客観的な数値によって裏づけられることで、安心感や理解の補強につながるという言及もあった。心理検査によって得られた数値が、介入の前後での変化を示すことで、状態の改善や悪化を把握する根拠となっていた。数値だけでなく、それを基に公認心理師が行う見立ても、多職種間での方針決定やカンファレンスにおいて中立的な情報として共有される意義が語られていた。全体として、本サブグラフは、心理検査が客観的な見立てとしてチームの理解を支える役割を担っていることを示している。

サブグラフ⑤は「臨床」「経験」「方法」のつながりで構成されており、患者との関わりを調整する実際の方法について具体的に言及されていた。チームに対応を促す場面等が含まれており、臨床現場における公認心理師の役割が語られている。また、経験豊富なスタッフは自身の感覚を確認するために心理検査の結果を活かしており、経験の浅い職種にとっては公認心理師の伝え方や接し方の工夫などが学びとなっていることが伺え、全体としてサブグラフ⑤は、心理検査による患者の長所や強みの理解が、現場の経験や気づきを支え、臨床実践における関わり方の工夫を促すヒントを与える存在として機能していることが読み取れる。

サブグラフ⑥～⑧は、心理検査で具体的に何を評価しているかを示すサブグラフ群であると考えられた。

サブグラフ⑥は「傾向」「性格」のつながりで構成され、心理検査によって得られる性格傾向の理解に関して言及されていた。心理検査結果から得られる情報は、患者の気分、不安、ストレス耐性などとともに、性格傾向を把握するために活用されている。結果は共有され、性格傾向の理解が、関わり方の調整や支援方針の検討に役立っているとの言及があった。心理検査結果に基づく公認心理師の見立てが、他職種にとって有益な情報源とされている。

サブグラフ⑦は「障害」「発達」を中心語とし、神経発達症を有する患者に対するアセスメントに関する内容であった。公認心理師が行う心理検査は、患者の理解力や発達段階を把握する手段として有効であり、その結果は他職種と共有され、患者への適切な接し方や支援の工夫に活用されている。

サブグラフ⑧は「認知」「機能」を中心語とし、認知機能の検査とその臨床的活用に関する内容から構成されていた。公認心理師が実施する認知機能検査の結果は、医師の治療判断やチームの対応に活用され、また、患者の理解力や意思決定能力を把握する手段としても重要視されている。

サブグラフ⑨～⑬は、どのような領域で役立っているかを示すサブグラフ群であり、インタビューの対象者が働く領域の特徴を反映した結果であると考えられる。

サブグラフ⑨は「リハビリ」「心臓」「循環」の語で構成され、循環器疾患患者のリハビリテーションにおける公認心理師の心理検査の活用と他職種との協働に関する内容であった。リハビリテーションでは患者の心理面への配慮が重視されており、検査により患者の不安や抑うつ傾向、認知機能の状態を把握する手がかりとなり、他職種に共有されること

で、チームの関わり方の工夫に役立っている。また、検査結果をもとに関わり方の助言をし、リハビリの進行を支援する場面も語られた。心理検査は、リハビリ導入前後での変化を測定する目的でも用いられていた。

サブグラフ⑩は「代替」「腎」「移植」「療法」「選択」「外来」の語で構成されており、腎不全患者における腎代替療法の選択支援に関する内容であった。インタビューの施設では、腎代替療法の選択外来において公認心理師が初回面談を担当し、患者の治療に対する理解や不安、治療意思の確認などに関して、心理検査を含む心理アセスメントを行っていた。公認心理師のアセスメントは患者理解の補助として他職種から評価されていた。また、移植希望者への心理的支援や、困難事例への対応において心理師の関与が有効とされていた。

サブグラフ⑪は「療養」「支援」の語で構成されており、生活習慣病や慢性疾患を持つ患者への療養支援に関する内容であった。糖尿病や肥満症などの患者への療養支援では、患者の理解や行動に心理的な要因が関わる場面が多く、心理検査の結果が患者理解や支援の方針に活用されていた。一方で、公認心理師の関与は限定的な場面にとどまっていることが課題として挙げられていた。

サブグラフ⑫は「ドナー」「コーディネーター」の語で構成され、移植領域における公認心理師のアセスメントに関する内容であった。移植コーディネーターは、生体腎移植を受けるレシピエントとドナーに関わり、両者の意思確認や心理面を評価するが、その際、公認心理師が行うアセスメントは、ドナーが抱える心理的な不安を明確にし、移植に対する意思を確認する重要な過程と見なされていた。

サブグラフ⑬は「指導」「栄養」「栄養士」の語で構成されており、栄養指導と心理支援の協働に関する内容であった。公認心理師のアセスメントは、患者の心理面を踏まえた栄養士による指導方法の決定に貢献していた。

サブグラフ⑭～⑯は、心理検査に関する言及は少ないものの、公認心理師による身体疾患患者への心理支援や他職種への対応に関する内容を反映した結果であると考えられる。

サブグラフ⑭は「透析」「腹膜」「血液」「内科」「外科」の語で構成されており、腎代替療法における療法選択や血液内科や外科における心理支援といった、身体科領域に公認心理師の機能に関する内容が中心であった。公認心理師が患者の不安や迷い、拒否的態度を傾聴し、意思決定に向けた心の整理を支援するケースや、認知機能に課題を抱えるケースでは、アセスメントの結果がチーム内の方針決定や支援に役立てられていた。

サブグラフ⑮は「心」「ケア」の語を中心に構成されており、身体疾患領域における患者の心理的側面への配慮や、その支援のあり方に関する言及が含まれていた。身体疾患の患者に対し、身体状態や数値が重視され、患者の心が十分に見られていないという問題意識が医療者にあることが発言からうかがえる。公認心理師による心のケアは、患者の治療意欲やセルフケアの継続を支える点で一定の役割を果たしているとみなされており、心理検査や検査以外での心理アセスメントを通じて、心のケアの必要性が明らかになる場合もある。また、医療スタッフや家族の心理的負担への言及もあり、公認心理師による支援が患者のみならず周囲の支援者の心の安定にも関与し

ている実態が語られていた。また他職種との連携の中で公認心理師が専門的に関与することについて、体制やアクセス面の課題も指摘されており、支援の継続性や連携の在り方が問われていた。

サブグラフ⑯は「連絡」「電話」の語を中心に構成されており、公認心理師との即時的なやり取りを示す語が多く含まれている。多職種は公認心理師に対して「電話一本で連絡できる」「頼みやすい」のように表現し、公認心理師の介入が受け入れられやすく感じられている様子が見えてくる。また、面談後には「電話連絡をくれる」「どうだったか教えてくれる」など、やり取りの中で自然に情報共有が行われており、公認心理師の介入状況を他職種が把握しやすい体制について言及がある。また「ちょっと気になることがある」といった早期の段階で公認心理師に相談しやすいことが強調され、非公式な形での連絡や共有が実践されている。これにより、患者の小さな変化にも迅速に対応する支援体制が評価されており、柔軟で継続的な連携の様子が本サブグラフに表れている。

ここからは、これまでの内容を通じた総合考察について述べる。本研究では、前年度に身体疾患患者に心理検査を行ったことのある公認心理師を対象に実施した心理検査の実施実態調査を受け、身体疾患患者に関与する医療専門職を対象に、心理検査が患者理解や支援にどのように役立っているかについてインタビューを実施した。その結果、テキストマイニングによる探索的な検討を通じて、共起ネットワーク分析により16のサブグラフが抽出された。

公認心理師による心理検査がどのような点で役立っているかに関して、「患者の心理状態・特性の理解ならびに他職種による対応への助言（サブグラフ①）」「カンファレンス等を通じた心理検査の結果の共有によるチーム医療の強化（サブグラフ③）」「心理検査による患者の長所や強みへの理解（サブグラフ⑤）」は、前年度の公認心理師対象の調査で、心理検査が他職種にもたらす利点として挙げられた内容と一致しており、公認心理師の実感が本研究により裏付けられたものと言える。また、「心理検査を含む心理アセスメントの活用（サブグラフ②）」についても、前年度の調査で心理検査以外の心理アセスメントが、実施される頻度が入院では外来よりも多いとの回答が得られており、本研究では外来か入院かについての設定は限定していないものの、心理検査に限らず、公認心理師による心理アセスメントが役立っていることが示唆された。日本公認心理師協会による実態調査では、場の構造に適した形で心理アセスメントを柔軟かつ包括的に実施する技能が指摘されており、心理検査や検査以外の心理アセスメントが、他職種にとって患者の理解にとどまらず、自らの臨床実践のヒントとなっていると考えられる。設定に限らず、患者の心理アセスメントでは現病歴のみならず、生活史や家族背景、社会環境なども評価していく必要があるが、今回のインタビューでは、他職種から自分たちはそういった内容までなかなか踏み込めないとの発言がしばしば聞かれた。こうした状況こそ、従来より心理状態や心理特性のみならず、生活史や家族背景、社会環境など横断的かつ縦断的にアセスメントしている公認心理師の強みが発揮される状況と言える。この点は、医療チームの公認心理師の役割を考える上でも重要な機能の一つと言えるのではないだろうか。今年度の本研究で新たに明らかになったのは、「心理検査による客観的データと治療判断のサポ

ート(サブグラフ④)」である。数値や客観的データで示される内容は、普段からそういったデータをもとに業務を行っている医療専門職には受け入れやすく、理解しやすいものであり、公認心理師としても説明がしやすい内容として機能していると考えられる。

心理検査で何を評価にしているかについては、性格傾向(サブグラフ⑥)、認知機能(サブグラフ⑦)、発達傾向(サブグラフ⑧)が明らかとなったが、認知機能や発達傾向は、前年度の調査で実施した心理検査の上位を占めており、それを反映するものとなっている。身体疾患の治療を進める上で、認知機能や発達傾向の評価が治療選択や同意能力の評価として重要であることが、他職種の視点からも明らかとなったと言える。性格傾向については、前年度にそれほど頻度として多くはなかったが、この後に述べる領域で行われる検査として挙げられたことが影響していると考えられるため、これについては後述する。

心理検査が実施されている領域としては、循環器(サブグラフ⑨)、腎臓(サブグラフ⑩)、慢性疾患(サブグラフ⑪)、移植(サブグラフ⑫)、栄養指導(サブグラフ⑬)が挙げられた。サンプルサイズの影響で、回答数は少なかったが、いずれの領域でも患者の心理状態や特性の評価目的で心理検査がルーティンとして組み込まれており、その中で性格傾向に関する心理検査を実施しているところが少なくなかった。身体疾患による心理面や生活面への影響を予めないしは治療経過の中で把握し、その内容を自身の介入等に生かすために、他職種が心理検査を重要なツールの一つとして捉えていることが示唆された。

本研究の対象者は、他職種の中でも心理職との連携を行っているため、普段から心理検査に触れる頻度が比較的多かった。しかし、インタビューでは院内で心理検査そのものがあまり知られておらず、その結果が十分に生かし切れていないのではとの発言が複数の対象者から挙げられた。身体疾患の患者は身体状況等で心理検査の実施自体が少ないこともあり精神科領域と比較すると身体科領域では心理検査自体が知られていない。したがって、患者の心理状態や特性を理解し、他職種の実践に生かすには、今回明らかになったように公認心理師自身も心理検査や心理アセスメントの伝え方について今後ブラッシュアップしていく必要があるものと考えられる。また、身体科領域の公認心理師はスタッフ数が限られた中で多岐にわたる業務に従事している。そのため、心理検査や検査以外の心理アセスメントが必要となる患者がいても、そこに十分な時間や労力をかけられないといった、公認心理師のマンパワーへの言及も少なくなかった。公認心理師の国家資格化以降、チームにおける公認心理師の活動が診療報酬化されるようになってきているが、チーム医療において公認心理師の心理検査を含む心理アセスメントが医療経済的にも適切に評価され、身体科領域での公認心理師の人員が増えることで、チームの医療の質向上、ひいては医療全体の質向上に貢献することが期待される。

E. 結論

本研究では、身体疾患患者に対する心理検査の活用方法や評価されている機能を、専門職の語りから体系的に可視化した。テキストマイニングによる共起ネットワーク分析の結果、他職種からみた公認心理師による心理検査の機能や、心理検査で具体的に何を評価しているか、心理検査が実施される領域といった、16のサブグラフが抽出された。心理検査が循環器疾患、腎疾患、移植医療、慢性疾患、栄養指導など多様な身体科領域において、患者理解と支援方針の形成に重要な役割を果たしている実態が明らかになった。身体疾患患者の心理アセスメントでは、心理状態や心理特性といった心理検査の結果のみならず、生活史や家族背景、社会環境など横断的かつ縦断的にアセスメントすることが重要である。こうしたアセスメントを他職種と共に進めることで、活動がチーム医療における公認心理師の活動として、診療報酬含め適切に評価されることが望まれる。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし

2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得
なし

2. 実用新案登録
なし

3. その他
なし

引用文献

日本公認心理師協会(2021) 公認心理師の活動状況等に関する調査 厚生労働省令和2年度障害者総合福祉推進事業 <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000798636.pdf> (最終アクセス: 2024年5月10日)

日本公認心理師協会(2022) 医療機関における公認心理師が行う心理支援の実態調査 厚生労働省令和3年度障害者総合福祉推進事業 <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000966884.pdf> (最終アクセス: 2024年5月10日)

樋口耕一(2023) 社会調査のための計量テキスト分析 第2版 ナカニシヤ出版

細川佳能・助友裕子・石井香織・岡浩一朗(2021) 都市部におけるスポーツ推進委員の連絡調整機能の特徴-計量テキスト分析- 日健教誌, 2021; 29(4): 337-347

表1 研究協力者の概要 (N=20)

性別 (%)	男性	6 (30)
	女性	14 (70)
年齢 (SD)		40.2 (7.6)
職種 (%)	医師	2 (10)
	看護師	11 (55)
	理学療法士	5 (25)
	管理栄養士	1 (5)
	子ども療養支援士	1 (5)
臨床経験年数 (SD)		17 (7)
公認心理師との協働年数 (%)	1-3年未満	7 (35)
	3-5年未満	5 (25)
	5-7年未満	1 (5)
	7-10年未満	2 (10)
	10年以上	5 (25)
公認心理師と同じ部署かどうか (%)	同じ部署	2 (10)
	別部署	18 (90)
公認心理師との協働の程度 (%)	同じチームで一緒に活動している	3 (15)
	必要に応じて協働し、その頻度は多い	9 (45)
	必要に応じて協働するが、その頻度は少ない	8 (40)

表2 抽出語リスト (上位 60 位 : 名詞、サ変名詞、形容動詞、タグ、名詞 C)

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	心理	1000	21	状況	76	41	しれない	57
2	患者	598	22	対応	76	42	一緒	57
3	検査	489	23	必要	75	43	不安	56
4	人	222	24	相談	74	44	理解	56
5	看護	179	25	チーム	72	45	指導	54
6	移植	167	26	カンファレンス	71	46	腎	54
7	感じ	147	27	情報	71	47	活用	50
8	話	134	28	リハビリ	70	48	実施	50
9	風	111	29	先生	70	49	共有	47
10	外来	110	30	病棟	70	50	場面	47
11	透析	108	31	評価	69	51	選択	47
12	療法	91	32	医師	66	52	依頼	46
13	じゃない	89	33	家族	66	53	ではない	43
14	アセスメント	85	34	面談	66	54	スタッフ	43
15	治療	83	35	疾患	64	55	自分	42
16	入院	81	36	機能	63	56	状態	42
17	形	80	37	他	61	57	具体	41
18	公認	79	38	職種	60	58	最初	40
19	精神	79	39	部分	59	59	身体	40
20	認知	79	40	説明	58	60	生活	40

総抽出語数 : 11960、重なり語数* : 1396、出現回数の平均 (標準偏差) : 8.57 (37.41)

*テキストの中で、ある単語が繰り返し使用された場合、それを全体で1語として数えた数

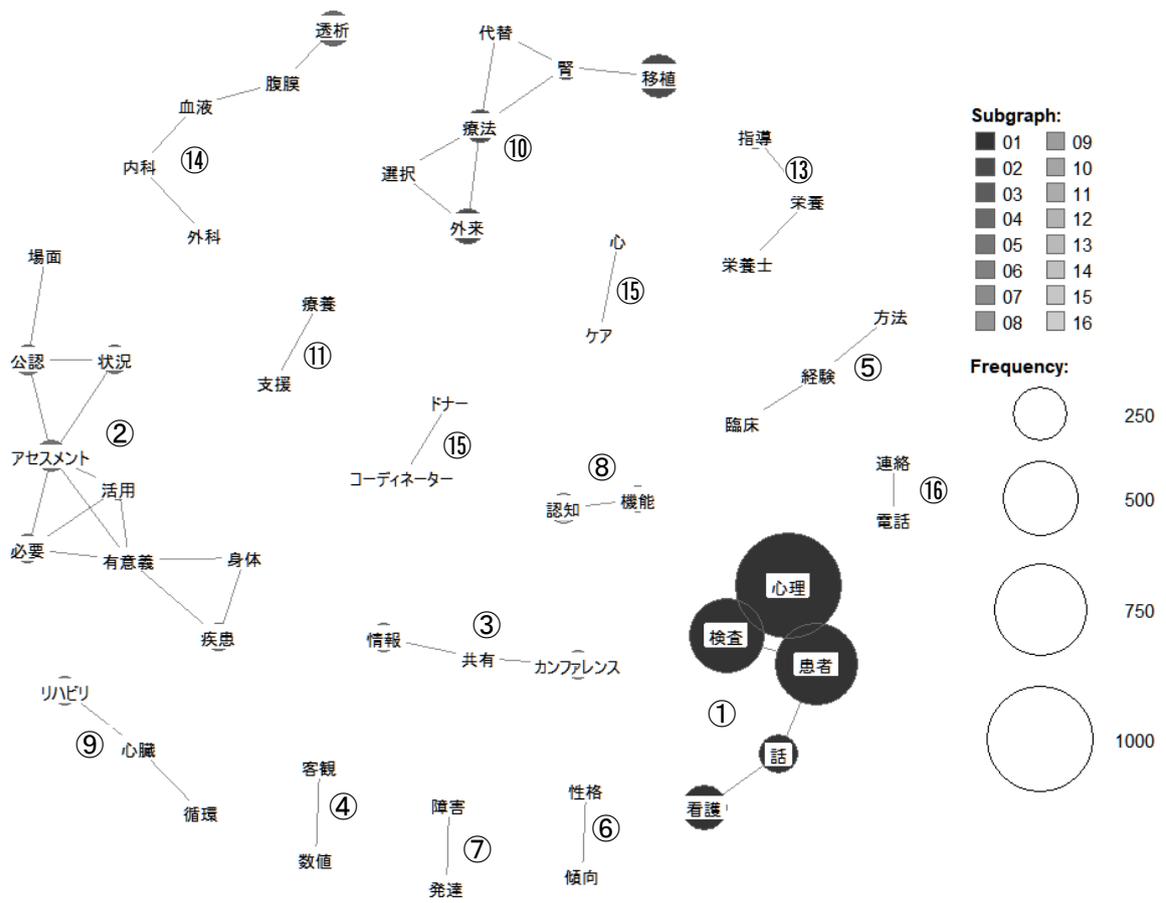


図1 共起ネットワーク (①～⑯はKH Coderによって識別されたサブグラフに筆者が追加した番号)
 (最小出現回数：10、Jaccard係数：0.18、集計単位：段落)

表3 心理職による心理検査の機能に関する共起ネットワークのサブグラフの解釈

#	ラベル	共起語	対応する自由記述の例
1	心理検査による患者の心理状態・特性の理解ならびに他職種による対応への助言	「心理」「検査」「患者」「話」「看護」	「HADS、POMS、そしてパーソナリティ検査です。心理検査の結果から、患者さんの気分や不安、気分の状態、性格傾向といったものが明らかに」「心理検査データが特に役立つ状況として、例えば、患者さんが現状より負担の大きい治療を受ける場合です」「心理検査は、ストレス耐性がどうかとかがあっていうところで」「心理師は、患者さんの特性を理解し、適切な対応方法をアドバイス」「心理検査によって患者さんへのアプローチの仕方にも役立て
2	心理検査を含む心理アセスメントの活用	「場面」「公認」「状況」「アセスメント」「活用」「必要」「有意義」「身体」「疾患」	「生活している場面を想定したフィードバックをもらえていると思います」「心理師のアセスメントを聞いてアプローチなどを工夫しています」「検査に限らず面接によるアセスメントも含めて有意義に活用されるようになるためには、保険の範疇で動けるようになること、病院全体で公認心理師は2人しかいないので人員を増やしていくこと」
3	カンファレンス等を通じた心理検査の結果の共有によるチーム医療の強化	「情報」「共有」「カンファレンス」	「検査が何点でしじやなくて、検査から分かったことを他の情報と合わせて、こんな方ですとか、こういうことに気を付けてくださいというフィードバックを受ける」「心理検査と体力測定は同じような日程で実施し、結果をデータベース化してカンファレンスで共有しています」「リエゾンに特化したカンファレンスは、多くの情報共有ができる貴重な場となっています」
4	心理検査による客観的データと治療判断のサポート	「客観」「数値」	「心理検査は主観的な文章ではなく客観的なデータとして示される。内科の先生や外科の先生はデータで判断することが多いので理解してもらいやすい」「臨床実践の中で感じている、この所気になるなみたいなことが客観的な数値に、で、きちんと見てもらえるっていうのは安心感にもなる」「心理検査の結果の数値がどうこうというよりは、この数値を元に心理師が解釈をしてその所見をカンファの場で共有している」
5	心理検査による患者の長所や強みの理解	「臨床」「経験」「方法」	「こういう傾向のある人にこういう風に話してあげるとうまくいきましたよっていう面談経験をアドバイスしてくださってうまいって」「『全然できないよね』みたいな、レッテルじゃないけどそういうのがあって、どう方法でいったらいいのか行き詰まってる時に、別の角度からの意見がもらえる」
6	患者の性格傾向の理解と対応への助言	「性格」「傾向」	「心理検査の結果から、患者さんの気分や不安、気分の状態、性格傾向などが明らかになり、それをカンファレンスで共有しています」「心理師は『この方は管理職で厳格な性格であるため、弱音を吐きにくいのではないか』と推察していました」「患者さんに検査をしていただいで面談してもらって、どういう風な性格傾向があるから、こういうことを目標にこういう気持ちでやっていくといいですよ、っていう助言をもらっています」
7	発達障害患者への心理検査と対応への助言	「障害」「発達」	「発達障害や神経発達症が疑われる場合は、一般病棟では、発達障害の検査は時間もかかるので精神科で」「就学前、小学校入学前や中学入学前といったタイミングでの発達検査の希望が多いです」「口頭だけでは伝わりにくい事柄について、模型や写真を使いますが、発達検査の結果があると、視覚優位なのか、ワーキングメモリーが低いのかなどが分かり、伝え方の工夫ができる」
8	患者の認知機能評価と臨床的活用	「認知」「機能」	「血液透析か腹膜透析かを決める時に、手先とか、認知度とか、理解度とかを全部心理師さんがお話し聞いて評価してくる」「検査で高次脳機能の弱いところがわかるので、視空間認知の弱い人は視空間認知のトレーニングを体のリハビリと一緒にしたりなど」「治療によっては脳神経系に副作用が出るのが怖いから、認知機能の経過を1週間ごとにとって、経時的に検査を行うこともあります」
9	循環器疾患患者に対する心理検査とリハビリスタッフとの協働	「リハビリ」「心臓」「循環」	「当院の心臓リハビリに心理師の導入を依頼した経緯が、心臓リハビリの循環器の患者さんにストレスが関係しているからと心臓リハビリに導入される方は全員に心理検査が入ります」「患者さんには必ずリハビリも入っているので、リハビリの時の様子どう？とかコミュニケーションをとっています」
10	腎代替療法選択支援における心理アセスメント	「代替」「腎」「移植」「療法」「選択」「外来」	「療法選択外来で公認心理師と関わることが多いです。腎代替療法選択外来では、初回の患者さんの面談をまず心理師が行い、その後、看護師が説明を行っています」
11	慢性疾患患者の療養支援における心理アセスメント	「療養」「支援」	「肥満症チームだけでなく糖尿病療養支援チームでも、心理師さんにチームに入って頂いてる」「心理検査の結果を支援時に見ることが多いです。子どもたちに検査の手順や感じ方を伝える際に参考に」「まだ心理師さんが入る形になっていないのですが、患者さんの退院支援カンファレンスをする時に入ってもらえると、心理師さんの見立てが役立つかも」
12	移植領域における心理アセスメントと心理支援	「ドナー」「コーディネーター」	「患者さんとの関わりで得た印象も共有し、患者さん自身の移植への意思や、ドナーの意思確認も行います。移植後1年後も、心理検査と心理面談」「移植コーディネーターとして、主に生体腎移植のレシピエントとドナーに関わっています。頼りにしています」「ドナーがかなり緊張されていて大丈夫かと思っても、十分話を聴いていただくと、落ち着かれる」
13	栄養指導における心理検査と対応への助言	「指導」「栄養」「栄養士」	「生活指導の時に検査してもらって、その患者さんに有効な指導方法とか有効な関わり方とかを提示してもらって」
14	身体科領域における公認心理師	「透析」「腹膜」「血液」「内科」「外科」	「療法外来のところに心理師が関わっている」「今までの対応で大丈夫と背中を押してくれました」「外科の先生が患者の長期療養のためにはこころのケアが絶対重要って言うてくれて、心理師の意見を取り入れてくれる」
15	身体疾患患者の心理的ケアと支援体制	「心」「ケア」	「皆身体とか数字は見るけど、気持ちとか心を見てないって思ってたので、心理師が入ってそこが見られる」「患者さんが亡くなるなど精神的に負担がかかる出来事が多く、看護師も心が疲れてしまう。心理師さんはそこもフォローしてくれる」「外科の先生が患者さんの長期療養のために心のケアが絶対重要って言って、チームが始まった時から心理師がいます」
16	公認心理師による他職種への即時対応	「連絡」「電話」	「心理師に相談することで、具体的なアドバイスをもらうことができました。例えば不定愁訴で電話かかってくる人にどう関わるとかかの助言」「患者さんがいる場でそのまま電話を掛けてくれることがほとんど」「関わりに悩むような人の時には、電話をかけて相談したり」